
裏切り者と追う者

茜丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切り者と追う者

【Nコード】

N8726D

【作者名】

茜丸

【あらすじ】

舞台は空想の現代。 2017年。 世界には“化学外の自体”と呼ばれる魔法が一般市民に広まりつつある。魔法の種類は三つあり、初めは一定の人間しか扱う事はできなかった。しかし、五十年前に開発されてからというもの、魔法は一つの商品として売られるようになっていく。そんな世界に住む少年「海飛^{カイア}」は、一般人とは少し異なる魔法を持っていた。それは、“継続魔法”と呼ばれるものだ。世界の变革と復讐を。これは、私たちの住む世界とはちょっと違う現代の物語。

ブローグ

紅が、自分のものとは思えない。

忘れない。忘れはしない。

暗闇に沈んだ町。

滴り落ちた雫。

凍てついた道。

鼻を刺す鉄臭さ。

はしる痛み。

この身体から流れ出した血の上に立つお前。

分厚い雪雲の浮かぶ、虚空はとても低いところにあつた。

この虚ろな瞳に映っていたのは、お前の背中。こんなに近くに居たのに、手を伸ばしても、届かない。

あの日、初めてお前の笑顔を見た。今となつては、それが本物の表情だったのかは分からない。

あの日、初めてお前の泣き顔を見た。今は、それが本物の表情だったのがよく分かる。

身体のどこか深いところから、何かが崩れる音がした。

ずっと積み上げてきた、形のない、しかしきちんとそこにあったモノ。
価値はないけれど、大切だった。知識と呼ぶべきか、経験と呼ぶべきか。

一体何が、過ちだったのだろうか？

お前は今。どこに在る？

お前の心は今。どこに在る？

恨みはない。恨みはない。恨みはない。

何もない。何もない。何も残ってはいない。

俺が求めていたのは、お前だよ。

俺がいつも見ていたのは、お前だよ。

俺がずっと引かれていたのは、お前だよ。

たくさん殺したね。

崩れ逝く。短い悲鳴を上げて。

崩れ逝く。血を吹き出して。

思い出せば思い出すほど苦しくなる思い出に、蓋をした。

……復讐を。

お前はそれを、望んだんだな。

一話 ご近所様 No.01

「一話」ご近所様」 No.01」

風は今日も吹き続けて、頭上に永遠と広がっている空に波打つ。

目には見えていないだけで、空には風が海面の白波のように吹き荒れているのだ。それに浮かび流れるのが、不規則に姿を変えながら空を航海する航海者。一般的に雲と呼ばれるそれだ。

地上よりも高く、海よりも広い。地上を監視する監視者。空。

手を伸ばしてみても掴む事は不可能で、せいぜい太陽や月をその小さな指の輪で囲める程度。

空と海は似ていると誰かが言っていた。だが、実際はそうじゃないと、そう思う。その点、海の風である波、水はどうだ。コップで掬う事ができるだろう。

空と海は、対の存在なのではないかと、そう思う。交わる事は無いのだから、当たり前だと思わないか。

ああ、それならば俺は空で、お前は海が良かったな。

コンクリートで分厚く固められた固い道路は、昼間の熱を未だ保っており、太陽が西に傾いた今でも熱気を帯びていた。足下から朦々と上がる蒸し暑さと、それによりなかなか下がってはくれない気温のせいで、遠くの景色は歪んで見えた。

既に靴の中は、汗のせいで特有のジメジメ感に満たされており、靴下がいかに濡れているのかが想像できる。思わず表情が歪んでいくのが、自分でも理解できた。

ここ最近は何日の最高気温が三十五度と、とんでもないが快適と呼べるような環境ではない。理由としては、今の暦が“夏”という事だ。九月とだけあって、夏を終わらせまいとする紫外線の量が半端ではない。

ケータイ会社の宣伝に受け取った手持ちのウチワを取り出し、忙しくそれを上下させながら彼は歩道橋の上を歩いていた。国道の上を跨いでいるだけあって、足下のすぐ下には信号が近いのもあり、渋滞でほとんど動いていない自動車が無数にクラクションを鳴らし続けていた。それに引き替え、数人しか利用していない歩道橋を行く彼は、多少の優越感に浸りながら身に付けていたウォークマンのボリュームを上げ、歩道橋の階段を下りていった。

耳の奥深くにある鼓膜に、ポップの混じったロックバンド系の曲が大音量で響いていた。軽く頭を上下左右に揺らし、リズムにのりつつ足を帰路に沿って運ぶ。周りの人々から見れば、“ノリノリの若い学生”的な感じなのであろうか。そんな事を考えながら、コンビニや服屋など色々な店が連なっていて建ち並んでいる街道に行く。血を零したような真っ赤な夕焼け。もうすぐ暮れる太陽の光が眩しく

店々のガラス窓に反射していた。

洋食店の前を過ぎると、夕食ラッシュの客に備えて食材、料理の準備をしているのかなんとも美味そうな匂いが漂ってきている。香ばしい香りに、無意識の内に唾液が口内に溜まってくるのが分かった。

高校生で、しかも現在食べ盛りである彼が高校で食べる昼食に満足する事はなく、下校時になると決まって腹が悲鳴を上げる。コンビニに立ち寄って菓子パンの一つや二つを買い食いしたいのは山々なのだが、金欠によりそんな行動には移る事ができない。食欲というものを紛らわすように、無理矢理に音楽に浸る。それが、彼の下校時の現状である。

「一話」『近所様』 No. 01 以下続く

一話 No.02

ふいに、電気器具屋の店内に視線を奪われた。薄いガラス一枚の先に広がる狭い店内には、最新の薄型テレビが大小様々に並べられていた。値段はともではないが彼が購入できるような数字を示してはいないが、彼が興味を持ったのは商品のテレビではなく、その画面に映し出されているニュース特報なのであった。

『 えー、次のニュースです。先日、×××に住む、四十代の女性が自宅付近で死亡していたのを近隣住民が発見しました。』

女性の身体には無数の切り傷があり、その傷の形から女性は に襲われた可能性があります。

現場の×××地区では、数日前新たな“異世”の出入り口が発見されたばかりで、犯行を犯したであろう は、その出入り口から侵入したのではないかと思われます。

なお、まだ は確保されていないので、現場付近の住民の方は充分注意をして下さい。

えー、続いては 』

綺麗に整えられた黒髪のショートヘヤーの女性 ニュースアナウンサーが、淡々と昨日今日に起こった事件を言葉にして並べていく。トントン拍子で次々と述べられていくニュースだが、冷静に考えるとんでもない事件ばかりだ。ウォークマンを身に付けている

彼でも、画面下に表示されているニュースの内容を表したテロップと、流れる映像を見ることが、ニュースの内容は理解できた。

殺人レベルの凶悪なニュースでも詳しい事を説明してはいなかった。

警察庁の調べでは、ここ数十年の内に殺傷事件の起こる率が急激に増加している事が判明しており、あまりにもその件数が多いためそれぞれの事件の詳細を述べる時間が、各番組にはないのだ。限られた時間内で番組を完成させなければいけないのだから仕方がない事だ。

そして、ニュース番組の中には放送する事件そのものをすり減らし、その分事件の詳細を述べているものもある。

殺傷事件が一日に報道される件数は、今では平均して四十件程度である。しかし、その数はあくまで国内での数値なのだ。この大陸いや、この星での一日の死者は何人になるのだろうか。そんな知識は持つては居ないが、そんな事に思考を巡らせているうちに、彼はある本屋での立ち読みした本を思い出した。

数を数えよう。数を数えよう。

一、二、三、四。

さあ数えたかい？ 今、この瞬間。この星で十人もの人間が死亡したんだよ。

そんな文章が、並べられた本だ。

殺傷事件が増加しはじめたのは数十年　五十年程前の事だ。そして、何故五十年前から殺傷事件が増加し始めたかの理由は既に調べられていた。理由としては、その“五十年前以前にはなかったものが世の中に広まった事”だ。それは、小学校低学年の子供達が学ぶような常識の知識なのである。

「……………」

ふいに、幼い自分が脳裏に映った。

背は今の半分以上。髪は黒い。目は大きい。

あどけない表情をした幼い自分　少年が指をくわえてすがりついている、深緑色のコートの裾は小さい少年の隣にいる男が羽織っているものだ。「もう、人々が殺人に対して心を痛めなくなる日は近いのかもしれない」と、その誰かが言っていた。

今では、その誰かがどんな顔をしていたのかすらも思い出せない。ただ、その時の表情が悲しそうだったような気がする。この小さな身に向けられていた誰かの瞳は少年を捉えて離さず、その眉尻は下がっており口角は上がり、切ない笑顔を残していた。

現実に視界が戻り、潤んだ目をこすった。どうやら目に虫が入り込んだらしい。未だに瞼の下側で生きている小さな虫がうごめいて

いるのを感じた。こうなると本当に気持ちが悪いのはほとんどの人が経験済みだろう。同時に、独特の痛みが目裏にはあった。

実際、ニュースで放送されている事など一瞬興味を湧かせてくれるだけで、数分後には記憶からデリートされる。どんな残忍な事件であろうと、映画を見るような感覚なのだ。その時には小さな感激や痛感を伴うものの、すぐに頭のメモリーからは消え去る。一時的な哀れみなど、テレビ画面に映し出されている被害者の遺族も求めないだろう。

〔続く〕

一話 No. 03

IF 変えられない未来があるとしたなら

IF 変えられない君がいるとしたなら

手を伸ばして 血を拭って 壊れても追うよ

愛している 愛してくれた日々を

君に捧げる 歌を 歌うよ

紡いでいくよ 永久届けと 歌を

本日何曲目だろうか。ちょうどこのウォークマンに入れてあったアーティストのアルバムの一曲が終わろうとしていた。

数分前に歩いていた街道とはうって変わり、今彼が足を進めているのは何か素朴な雰囲気を漂わせている住宅街の細道である。石を切り抜いたブロックを積み上げた塀が彼の歩く道の両側に建っていて、各家庭では夕食タイムなのであろう、にぎやかな笑い声が時折聞こえていた。そんな小さな笑い声が聞こえたのは、ちょうどウォークマンの充電が切れてしまったのが原因らしい。何故、と記憶をさかのぼると、一週間前に充電をして以来一度も充電していない事に気が付いた。「ああね」と相づちを打つと、彼はしぶしぶ耳から白いイヤホンを抜き取り、そこから本体へと伸びるコードを鬱陶しく思いながらも丁寧にそれを本体に巻き付け、担いでいたスクールバックの外側ポケットに収納した。

スクールバックは濃い青色で、角はすり減り既にオンボロ。彼の通う高校の友達に落書きされた痕跡も残っていた。だがそんなバツ

グを買い換える金すらも彼にはなく、毎日の食事以外に物を買うのは減多になかった。

人工的に染めた灰色の短髪を掻きむしった。先程ケータイで見た記憶によると、現在の時刻は午後六時頃だったはずだ。夕食時が早い家もあるものだな、と思いながら視線を笑い声のする家に向け、すぐ後にはそのまま帰路に視線を戻した。

真夏であつた八月に比べるとだいぶ日照時間は短くなっており、六時現在の今は少し薄暗い。だが、体感温度は未だに下がった感じはしない。

ふいに、頭の上を何かが横切った気がし、彼は少し黒みがかつてきた空を見上げた。そして、見上げてすぐに気付いた。彼の頭上を通過したのは一羽の小鳥だ。彼の視線の先には弧を描きながら飛ぶ小鳥がいた。

夕暮れ時の薄暗さのせいで、なんという名の鳥なのかは分からず、小鳥の黒い影だけが確認できた。寢床へ帰る途中なのだろうか、そんな呑気な事を考えながらぼんやりと遠ざかつていく鳥を目線だけでしばらく追っていたが、そんな自分に何をしているんだと一人ツツコミを入れる。そして、無意識の内に止まっていた足を前に出した。腹が減っては戦が出来ぬ。という言葉が何故か頭に浮上していた。

西の空は紅いままだったが、その明るさを浸食するように東の空

からは夜の暗闇が迫ってきている。ちょうど夜と夕方との境目のようだ。あまりの空腹に若干涙目になりながら、足を急がせ彼は自宅であるアパートへと駆けていった。

しばらく先程の道をまっすぐ進み、数十メートル先には河川を確認できるぐらいの十字路を、車が来ないか一瞬注意を払った後に左の道に曲がる。そして、その十字路の傍らに立っている民家の屋根の上にある錆びた鉄製のアンテナは、台風の影響が斜めに倒れてた。彼自身が友達をアパートに呼ぶ際には、いつもこのアンテナを目印にしている。

その十字路を曲がった先に、彼の住むアパートが位置していた。

鉄筋造りで、耐震強度は不明。壁の表面はブツブツとした白い塗料で塗られており、ところどころ剥がれ落ちている。元は白かったのだろうが、今では剥げかかったベージュといったところであろうか。屋根は同じく剥げた赤茶色をした鉄板で、太陽に長年さらされていたせいか、パキパキとひび割れたそれが各部屋のベランダ付近に落ち溜まっている。ひっくるめると、ぼろいのだ。

四階建てであるこのアパートは外見通り古く、五十年程前に造られたものなのだそうだ。また、河川とは平行になるように建っており、玄関側には電車が。一畳程のベランダ側には河川の風景が広がっていた。室数は一階につき五室という計算で二十室である。

一話 No. 04 (前書き)

今日も短めです。というか、進歩がないです；

一話 No. 04

親子揃ってこのアパートに住んでいる家族は少なく、ほとんどは大学などに通うため一人暮らしをしている若者達だ。そんな学生がこのアパートに住まう理由はやはりその家賃の安さにあった。何故安いのか。それは、玄関側すぐに行き交っている電車の通過時の騒音や揺れ。そういったものだ。

彼の住まいはアパートの三階に位置しており、そこまではアパートの外部に突き出た階段を上って移動する。階段は、玄関側、ベランダ側を行ったり来たりしてる内に上るような造りになっており、一つ階を登るのには二度階段を登る計算になる。

彼は自室の前に立つと、持っていたスクールバックの外ポケットから錆びた鉄の鍵を取り出し、取っ手のくぼみに差し入れ半回転させた。ガチャツという聞き慣れた音をたてると、彼は肌色をした鉄製のドアを押し自室に入って行った。と、その時。

「……ん？」

ふいに、スクールバックの中からブブブ、ブブブと、マナーモードにしたままであった携帯電話が震えている事に気が付いた。しかし、どうせメールだしすぐに鳴り止むだろうと思い、彼は携帯電話を取り出さずに玄関にスクールバックを投げるように放り投げると腰を下ろし、窮屈な紐靴を慣れた手つきで脱いだ。

が、携帯電話の振動は今だに止まない。

通話かいつ！

瞬時にそう判断すると、彼は軽く慌ててバッグから携帯電話を取り出した。何度も落として傷まみれにしまっただいにも男子らしい携帯電話である。携帯電話を空け、その発信者を確認。すると、そこには見慣れたある人物の名前が記されていた。

通話のボタンを押すと、彼はため息混じりの声で「……もしもし」と言った。すると、

『海飛ーっ！ おまえまだ帰って来ねーのかよ！ 今どこほつつき歩いてんだこの野郎！』

「っさいな俺を中耳炎で殺す気かつ！ 今帰ったとこだよ！」

体育の教師が運動場で遠くの生徒に向かって吐く大声を連想させる通話の相手は、さもかし彼の自室にいるような口ぶりである。しかし、その通話の相手は彼の自室には居ない。正体は、同じアパートに住む隣人様であり、既に声変わりを済ました大学生様である。

彼 海飛と呼ばれた彼は携帯電話を顎と肩で挟むと、苛ついた

表情をしながらスクールバッグを持ち上げ自室のソファアへと向かい、そこに再び投げた。

『遅いんだよオメエは。こっちは海飛が腹減ってるだろうと思って晩飯の準備してやってるつてのに』

「うわ珍し。アンタ料理とか出来たんだ」

『なめんじゃねーよ。カップラーメンとチャーハンなら任せろつてんだ』

「それ、湯う入れるか、炒めるしか出来ないじゃん」

『そんだけ出来れば人間生きて行けるつての』

ハハハと同時に二人笑い声をあげると、海飛は断りもせずに通話を切り、十畳ほどの長方形型をした縦長の部屋一室だけの自室にポツンと置かれた、小さな冷蔵庫を開けた。彼の身長半分程度の大きさがない冷蔵庫は冷蔵庫と冷凍庫の二段になっている一般的なものだ。下の冷蔵庫の中には、何日か前にコンビニで買った二リットルのコーラが入っており、それを取り出すと海飛はそれを口にくわえ片手でラッパ飲みをした。ゴクツ、ゴクツと、勢いよく音をたてながら喉に泡のはじける爽快な冷たさが通りすぎる。真夏なので、帰宅時には何かを飲まなければやっていられないのが現状である。

喉を十分に潤わせると、彼は大きく息を吐き出し、蒸し暑い自室を見渡した。ここに一人暮らしをしている海飛はこの春高校に進学したばかりの学生である。親は海外で働いており、結構儲かる仕事をしているのかかわらず月に一度の仕送りは家賃と最低限の生活費のみ。おかげで、彼の部屋は一見整理整頓のゆきとどいた綺麗な部屋に見えるが、実際の所物資が乏しいだけなのである。小さなプ

ラスチック製の服入れ棚に、同じくちんまりとした冷蔵庫。そして、ステンレス台の大きめのベット。部屋の中央に無雑作に置かれている折りたたみ式のパソコン。あとは、百円均一ショップなどで買ったインテリア。そんなものしか海飛の部屋には置かれていない。大抵は黒を貴重としている部屋の壁には、彼の好んでいるバンドのポスターなどが貼られている。

水道やコンロなどといったダイニングルームはなく、リビングと同化しており、バスルームは三畳ほどだが一応設備されている。

一息つくと、彼は飲みかけのコーラを片手に自室を出、鍵を掛けることなく一階上の四階に位置する先程の電話の相手の部屋に向かった。

* } *

「チヨリース」

「お、来たか海飛。あがれよ」

「もうあがつてる。うは、クーラーガンガン涼しー」

「ハハ。お前より一時間ぐらい前に俺帰って来たもん。今日はバイトないんだー」

ご近所様である男の部屋は、海飛と同じ造りのはずなのにどうにも圧迫感があった。理由としては、男の部屋の壁際に並べられた、

漫画がつめられてギョウギウウになっている棚のせいなのであろう。フローリングの上には真っ赤なジュータンが引かれており、床一面には雑誌などが散りばめられている。中央には低い炬燵布団のかけられていない正方形の机が置かれており、その上にはかろうじて何も置かれては居ない。

海飛はコーラをぐびぐびと飲み続けながら、通行に邪魔な雑誌を足で払いのけながら炬燵机のそばに腰を下ろした。そして、先程の自分の部屋と違い、とても快適な涼しさの男の部屋にうつとりとした。

キッチンに立つ男の背を見ると、彼は電子レンジで何かを温め直しているのか片足で貧乏揺すりをしていた。

一話 No.05 (前書き)

あんまり進んでない……。

最後の方、ちよつと重要人物登場の気配……。

一話 No. 05

「やっぱり今日もチャーハンなわけだ」

「おお良くできました。なんで分かった」

「臭い、するし」

「ん」。俺は作る前からここ居たからな。よく分からん」

海飛はクンクンと鼻で臭いを嗅ぐ仕草を大袈裟にした。

レンジで温め直した炒飯は、決して旨くはないだろう。しかし、彼ら二人は朝、夜の二食は共に摂っていた。理由としては、彼らはどちらも学生であるので、“金”がないこと。なので、少しでも食費を浮かせるために食事を共にしているのだ。いっそ同居にすればいいのだと、そんな話も挙がったが、海飛はそれを拒否したので、今のような生活を送っている。

海飛はレンジの出来上がりサインの音を待つ間、持っていたコーラの蓋を閉め、通学時から着用したままである制服の襟元を上下させた。すると、クーラーで冷えた空気が暑苦しかった胸に滑り込み心地良く幸せな気分になる事ができた。海飛の制服は至って普通なもの、上着は半袖のシャツ。下は、黒い長ズボンである。そのうちに、ピッピッピという一定のリズムでの電子音がレンジの方向から聞こえた。どうやら夕飯の炒飯が温まったという、待ち望んでいた瞬間が訪れたようだ。大袈裟のようだが、海飛の腹はそれほどまでに空いていた。

「へい、待ちどーい」

男はそう言い、炒飯が山のように盛られた二つの皿とスプーンを器用に担ぐと、おぼんを使用せずにこちらにそれらを運んできた。そして、ドスンという大きな音をたてて海飛がついていた炬燵机に皿を置き、自分の座る場所の雑誌を払いのけるとそのまま海飛の向かいに腰を降ろした。

「いただきます」を言わず、そのまま海飛はスプーンを手に取りほかほかと蒸気を漏らす炒飯の山を、勢い良く崩し、そのまま流し込むように口にかきいれていった。

* ； * ；

深夜。

その路地裏は、左右を飲食店に挟まれており、店の裏口から出された生ゴミにより悪臭が漂っていた。換気扇からはき出されている妙に暖かい風のせいか、終わりに近づいた夏の気温のせいか、夜だというのに彼の頬には一筋の汗が流れていた。彼は、その汗にへばりついた、肩まである黒髪を鬱陶しそうに払いのけると、着ていた学生服の胸ボタンを一つ空けた。

一話 No. 06

ほとんど何も見えないような、そんな暗闇の中。チカチカと寿命が短くなつた電灯が、一秒一秒コマを遅れて進めるように、目の前に転がった男の姿を映し出していた。

息を荒くして少年の足下にはいつくばる男は、スーツ姿をしていた。男は自分の横腹付近を震える手で力一杯押さえており、そこからは塞き止める事のできなかった大量の血が溢れ出ていた。口から顎にわたって伸びた赤色の図太いラインは、男自身が吐血したものである。

「流石は“監視者” ってところか。最後の最後まで口が堅いようだな」

少年は氷を思わせる冷たい眼差しで男を見下ろすと、平然とした様子で屈み、男の血が付着したままの手を男の襟元に伸ばした。そして、男の頭を自分の方へと引き寄せ表情を歪めて男を見た。

その時、男の目に映った少年の表情からは、先程の冷血さは感じられなかった。男が戸惑っていると、少年は口を再び開いた。

「お願いします。奴の……あいつの居場所を教えてください。僕は仇を討ちたいだけなんです。そうすれば、あなただって殺さずに済む」

少年は、先程とは違う、縊るような声で敬語を使った。

互いの吐息が、顔に静かにかかる。そんな距離。スーツの男は、腹の痛みに顔をしかめながらも、半開きになった両目で少年を睨み付け、薄く笑うと口角を上げ声を絞り出した。

「誰が……教えるか。世界の変革なんぞ、我々の主はなんの興味も
」
「残念です」

また一人。

遠くに響くクラクションの音。青信号に変わった、交差点の音楽。行き交う人々に一つの命が途絶えた悲鳴が届く事はなく。

左右の建物に囲われた夜空は、町の様々な光によってぼんやりと明るく染まっていた。電線で黒い線を引かれた空に浮かぶ、行き場の無くした月のように、少年は血をふき取ったハンカチをポケットにしまうと路地裏から出、大通りの人混みへと消えていった。

「序章 完」

*次回から、第一話に入ります。

二話 「継続魔法と一般魔法」

中年程の男の耳に本日真っ先に飛び込んだもの。それは。

その男と同じくスーツに身を包んだ部下が、真剣なまなざしを男に向けながら広い部屋の中央にたたずんでいた。

割と広々としている部屋は、床一面に赤い絨毯が敷かれており、男がついているずっしりとした木製の机は黒光りしている。また、その細かな装飾彫りがその机の高級さを物語っているように見える。そして、その机から高い天井に向かって伸びているのは、山積みになされた資料の数々である。

不機嫌そうな、それでいて疲れてやつれた顔をした中年の男は、険しく眉をひそめるとうなりながら机の上に両肘をたて、頭をかかえた。その眉間には、深い谷がいくつも刻まれている。

「また監視者を一人失ってしまったのか……」

中年の男はため息混じりでそう言い、重々しく黒い椅子をきしませながら立ち上がり、そして机の後方にある壁一面の窓に手を添えた。薄く自分の指紋がついたが、中年の男は目を細めて外の景色を見下ろした。というのも、この部屋は都会の高層ビルの最上階に位置しているため、全ての景色は眼下に広がっているのだ。

中年の男が見下ろした景色は、いくつものビルが高さを競うように地から空へと伸びている様である。遠くの景色は、廃棄ガスのせいか白みがかかってぼやけている。そして、町並みや看板の文字などから理解できるだろうが、ここは断じて日本ではない。

「だが仕方がない。新たに一人、監視者を日本に派遣しろ。アレが暴走でもしたら、日本……いや、この星自体が危険にさらされる事になる」

中年の男は、威厳をもって部下に命じた。

一瞬、反抗的な表情をして口を動かそうとした部下は、男に了解の意を示すと思い扉から出て行った。部屋に、扉の閉まる音が響き終わると、孤独な静寂が訪れた。ポツンと取り残された男はため息をつく胸ポケットからおもむろに二枚の写真を撮りだした。

一枚は新しく、映っている少年は高校の制服を着ており、隣にはその少年の友達と思われる者達が多数映っている。そして、もう一方の写真は古く、四つ角が少しすり減っている。映っているのは三、四歳の少年で、カメラ目線の瞳は青く鋭い。そして、二枚の写真に写った二人の少年は、顔つきはまるで別で、同一人物ではないことが分かる。

「創設者の子孫……“偽装魔法”……ねえ」

中年の男はそう呟き、写真の子どもを哀れむように、見下したように、見つめ続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8726d/>

裏切り者と追う者

2010年10月10日20時40分発行